

海魚名目載

卷十五

大正九年二月以降



特別
14
1919
264



變息市ノ執

(大正二年二月十三日起筆)

○桂閣顛覆霞洲谷 桂内閣と薩長も崩れんとす

んと政友会多数と議合するが長年の力とする

表面の原因也實もさうは政友会と云ふ故に強

くしゝてさうな薩長の後援するも薩長の政友会

の後援するもさうな如くさうな故に、此年の後

選定以来薩長の政友会のため、敵となる金

と大隈任の病を扱ふに二る策用らるる上ると云

ふ、其のまゝと何んぞと云ふと云ふ、其のま



圖書刊行會

川崎道船不^ある^もも^も大群分出^て居^るも^も
 通^る川崎道船も^も海軍の^の文^をを^をを^を
 出^しても^も換^をを^をを^をを^をを^をを^を
 い^かか^とえ^くは^は海軍と^と藩^を藩^を藩^を藩^を
 る^もも^も現^に現^に現^に現^に現^に現^に
 中の^の艦^を艦^を艦^を艦^を艦^を艦^を
 ハ^レハ^レハ^レハ^レハ^レハ^レハ^レハ^レハ^レ
 七川崎道船不^ある^もも^も大群分出^て居^るも^も
 が大隈侯の^の二^をを^をを^をを^をを^をを^を
 の^の説^を説^を説^を説^を説^を説^を

入^る入^る入^る入^る入^る入^る入^る入^る
 無^くく^くく^くく^くく^くく^くく^くく^く
 佐^の佐^の佐^の佐^の佐^の佐^の佐^の佐^の
 と^と思^は思^は思^は思^は思^は思^は思^は思^は
 久^くく^くく^くく^くく^くく^くく^くく^く
 完^了了^了了^了了^了了^了了^了了^了了^了
 内^の内^の内^の内^の内^の内^の内^の内^の
 敷^を敷^を敷^を敷^を敷^を敷^を敷^を敷^を
 の^のの^のの^のの^のの^のの^のの^のの^の
 の^のの^のの^のの^のの^のの^のの^のの^の

色懐ふ元後を遂げ比諱ひある天子諱
 在りてとて思はば其を薩長の事諱と
 表ひて中止する事とある、西園寺内閣
 比表味うる事と西園寺内閣をあらうと此
 一徹字にけねおせしむるの長うり此のむ
 り、和らまも流う無記の類をせしむること
 桂の心事を廻らうとて、こゝは世論を湯
 騰し桂閣を不人氣を懐けしむる也、こゝは生
 りて何んのかうとある事、あやう、脆く七類、あやうの

非運を免てのかある、備し免しては桂閣の
 御も不中際もたる事、うととて、お、洞を端む
 萬か自分なむ、中、更、桂を貫く冠つて居つ
 此ことを愧つる事ある、桂、閣の敗因と一
 して是らする、あ、う、其の最大原因を改定
 どの心得か既述する、解、一、概、ゆ、二、政、定、の
 出来、い、の、思つたり、洞、の、事、一、あ、ら、う
 いくら、澆、香、の、世、の、中、心、を、め、る、く、洞、の、開、け
 こと、洞、の、事、一、あ、ら、う
 大政を形造る事、い、の、事、一、あ、ら、う

自愧の甚しきものがある、そんな民間法政の
 うるやう主張する徳領と眞實行ふの決意を
 示しえんを讀むべきとししと出陣する譯あり
 ハまのしむべきあるもの、實を肝に留るる禁政變
 華と學ふ不得要欲心あり、唯此桂自れ先
 づ入るし時海二おを降す、固より何れも入るし
 比丈ともろれば、えんをすだけば一挙にさ
 ぬを得んと試みしむる強人と其を足して
 損なきものある、えんはさう新軍の數をヤウト
 のすむるべきも得べきは、きかぬ、必死地を

東を急しと強しきものも一向東に於て既
 又大東の東を急し比れを論敗因のささる
 ことのあつたもの、志を高くし、其の元は
 ありと略し、その解散の事あり、其の
 の極大況を極ふべきもの、其の此の
 等の事あり、出でさうし所以を、内定程々の
 原因あり、解散を行はさうし、就てをえん
 杞容懐入、諫諭中、解散を行ふの不可を
 論じ、其の論あり、之を棄れし、さうとも云
 以或は海軍、例を極東の事成を、憲法

解散ノ異議を以て争ひ合ふ事もお又大規模
を奏上し得る事にして孰れも激論を擧げざる不
任決激の故意に訊勅監査を以て
之流を以て之を奏す所とする事も許さざる事
之れを要する事初めし不憚なる政堂の形式
に辨まりて之の是非を以て之を以て之を以て
ハ世間の中前もあつて、いつての流儀も老を
うごく、特や、之の流儀を以て之を以て之を以て
と争つて扱ひて之を以て之を以て之を以て之を以て
の恒常中より之を以て之を以て之を以て之を以て

リ或許(勿論激論)とある(多量)に主意的の老
リ口を指南して之を以て、又其を以て之を以て之を以て
日長の間、殊に急流の状態を以て之を以て之を以て
必流の如くは口を以て之を以て之を以て之を以て
と居る事、其の如くは訊勅する事を以て之を以て之を以て
とらとも要領の要領を以て之を以て之を以て之を以て
扱ひ、新なる急流の如くは、其の如くは之を以て之を以て
る如くは、首肯が、其の如くは、其の如くは、其の如くは、
と之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
ふい、コンナも、其の如くは、其の如くは、其の如くは、

まるは世を嫌ふことと世をなす事との矛盾
 殊に世を嫌ふ事と不信の現れとをいふは
 佛の説教の上の世を嫌ふ事と世をなす事と
 何れも其のまゝ此の境に在るは誰れも成
 せざる也 桂自身も西遊記も私法す程とい
 へど地を嫌ふ事と世をなす事と又世を
 一も思ふ事とをいふ事と世をなす事と
 と外を嫌ふ事と世をなす事とをいふ事と
 り、世を嫌ふ事と世をなす事とをいふ事と
 私法す事と世をなす事とをいふ事と

ありし世を嫌ふ事と世をなす事との矛盾
 何れも早くとすの矛盾とす。前も早くも
 小辭も「出」は、世を嫌ふ事と世をなす
 事とをいふ事と世をなす事とをいふ事と
 く(世を嫌ふ事と世をなす事とをいふ事と)
 早く辭を「出」は、世を嫌ふ事と世をなす
 事とをいふ事と世をなす事とをいふ事と
 く(世を嫌ふ事と世をなす事とをいふ事と)
 又世を嫌ふ事と世をなす事との矛盾
 何れも早くとすの矛盾とす。前も早くも
 小辭も「出」は、世を嫌ふ事と世をなす
 事とをいふ事と世をなす事とをいふ事と
 く(世を嫌ふ事と世をなす事とをいふ事と)
 早く辭を「出」は、世を嫌ふ事と世をなす
 事とをいふ事と世をなす事とをいふ事と
 く(世を嫌ふ事と世をなす事とをいふ事と)

を清し給ふ事をも思給ふ事をもその的こそ能取
 の也もすこしと天宮御入御なりし主意的行動
 と流器をゆる善敵を目的とすことと清くする
 柱石の行動に、いふ出びさうししと政権を養
 へたる未練心もゆることと御さきとゆること
 美ゆふ善敵御方より意思あらんことと何
 事をもゆることと 觀望も人心を収攬する能
 ハさる事ん、喜する事も柱石を敗れし事も西
 國の徳大ゆたけと御方ゆたけと西公之御
 視しし事と未し政する事御裁し御し御し

る事もゆることと 柱石の御解後の内
 冥之未とゆることと 能くさする事ゆたけ
 王柱石御死の際の一葉其切と養ふこと
 とも御方ゆたけ 全体する事ゆたけ 柱石
 御死の際を引受けさる事ゆたけ 主意的
 の通義也而も西公起つ能くする事と首ね
 と清流の山本の御方ゆたけ 山本の御又既と大
 命を譲し給ふことと 能くさる事ゆたけ
 能くさる事ゆたけ 陣内と主する事ゆたけ
 御しし事ゆたけ 御しし事ゆたけ 政事會

内各の起るもいふるに政事令の條載る
 事しつ海軍の現職あるも陸軍人の内各
 を以てするの一事もいふるに政事令の條載る
 陸軍と海軍とをいふるに政事令の條載る
 といふ事しつ海軍打役有條操演を叫
 ぶといふ事しつ海軍打役有條操演を叫
 首職の條載る事しつ海軍打役有條操演を叫
 之意の大義にして是れ其の由をいふる
 凡ての内各もいふる事しつ海軍打役有條操演を叫
 内各もいふる事しつ海軍打役有條操演を叫

氣味を揚げていふるに政事令の條載る
 せんといふる事しつ海軍打役有條操演を叫
 之れを要する事しつ海軍打役有條操演を叫
 而して其の後の決裁も此の如き事しつ海軍打役有條操演を叫
 の初めは開く事しつ海軍打役有條操演を叫
 といふるに政事令の條載る事しつ海軍打役有條操演を叫
 といふるに政事令の條載る事しつ海軍打役有條操演を叫
 を以てするの一事もいふるに政事令の條載る
 陸軍と海軍とをいふるに政事令の條載る
 といふ事しつ海軍打役有條操演を叫
 ぶといふ事しつ海軍打役有條操演を叫
 首職の條載る事しつ海軍打役有條操演を叫
 之意の大義にして是れ其の由をいふる
 凡ての内各もいふる事しつ海軍打役有條操演を叫
 内各もいふる事しつ海軍打役有條操演を叫

柳をあらしきくろ瀬旅のちりよの也
 波高のくろくろ瀬旅のちりよの也
 桂をあらしきくろ瀬旅のちりよの也
 宮方改方人なるも改の重の徳なる者と
 するの執事をしるく瀬旅のちりよの也
 リ時局の死も一場の活説をいふよの也
 リ即ち語る所の要の徳の也し三月十三
 の物也

○村内湖前解後山本伯大命をおしひとも提聚

入瀬もんとし改方令の内部分科を極の山本伯大
 命を拜してしきく瀬旅のちりよの也
 世にすくもるも村内を執事長城の也を以
 つて執事しきく瀬旅のちりよの也
 こも真迷の瀬旅のちりよの也
 又降服する瀬旅のちりよの也
 とのスタッフモニガも或んと改方する所を以て
 山本伯大命の也世にすくもるも改方
 と休令又休令、大正初年の天也と山本伯
 大命の也世にすくもるも改方

流しと下谷橋本町の居を初め、昔は在りて
 ちよと名に色さる人々、方面の風味を
 と究しく、吉田、丹波、宮内、鹿嶋、鑄金、舟の
 青、花、瓶、茅、宮内、狼、籍、くも、主人、出、ろ、
 梅、子、年、を、二、千、一、と、云、く、と、を、昔、と、し、傳、へ、ま、二、
 三、歳、位、去、す、と、し、う、え、入、り、ま、す、り、く、く、え、
 氣、を、し、此、人、初、め、と、如、軒、と、ま、人、の、能、き、能、面、
 を、心、く、こ、と、を、之、の、後、如、何、夏、雅、を、何、と、を、鑄、
 金、と、志、し、夏、雅、は、後、傳、此、人、也、此、界、の、名、人、と、
 稱、せ、ん、現、に、帝、京、技、術、を、考、へ、り、う、く、と、を、鑄、

の、流、を、出、し、示、す、る、兼、意、作、ツ、バ、ホ、ツ、カ、
 を、力、め、を、ま、え、り、其、由、者、に、傳、へ、り、と、は、又、の、
 せ、た、花、瓶、數、個、を、采、り、一、箱、の、花、
 瓶、を、傳、へ、り、刻、の、精、細、さ、を、この、四、五、年、を、
 要、す、と、ま、苦、心、の、こ、の、也、此、の、花、瓶、の、價、
 二、千、四、三、十、兩、と、ま、怪、し、く、是、と、す、此、の、
 とも、主、の、こ、う、く、刻、金、を、而、七、味、を、ま、余、
 の、目、録、を、既、味、を、ま、あ、り、ま、す、
 先、に、角、分、人、の、既、味、を、不、お、高、の、と、の、也、
 此、の、中、の、ま、ま、属、黒、と、ま、り、ま、す、り、は、こ、と

う一ツある、そんを松、かゝのぬき、里すみと粘
 質のもの、^{（り）}まゝ、腐葉のある部分に附着し
 てたふこと、^{（り）}結う度、^{（り）}堅う、^{（り）}足さ、^{（り）}こゝろと
 附る所、^{（り）}せん、^{（り）}彫鑿の跡、^{（り）}金う、^{（り）}かんく
 と細音り、^{（り）}せん、^{（り）}老う、^{（り）}まゝ、^{（り）}ひ、^{（り）}せん、^{（り）}防く、^{（り）}ぬ
 め、^{（り）}あると、^{（り）}流、^{（り）}せん、^{（り）}湯、^{（り）}度、^{（り）}の、^{（り）}湯、^{（り）}急、^{（り）}流、^{（り）}の、^{（り）}ゆ
 2 先帝の太力を、^{（り）}夏、^{（り）}雅、^{（り）}と、^{（り）}せん、^{（り）}心、^{（り）}う、^{（り）}流、^{（り）}を
 出、^{（り）}此、^{（り）}の、^{（り）}太、^{（り）}力、^{（り）}を、^{（り）}昔、^{（り）}を、^{（り）}を、^{（り）}以、^{（り）}つ、^{（り）}て、^{（り）}鑿、^{（り）}う、^{（り）}む、^{（り）}め、^{（り）}て、^{（り）}
 せん、^{（り）}か、^{（り）}先、^{（り）}帝、^{（り）}の、^{（り）}印、^{（り）}信、^{（り）}式、^{（り）}う、^{（り）}か、^{（り）}之、^{（り）}ん、^{（り）}を、^{（り）}御、^{（り）}用、^{（り）}書、^{（り）}
 成、^{（り）}る、^{（り）}是、^{（り）}と、^{（り）}う、^{（り）}又、^{（り）}先、^{（り）}帝、^{（り）}の、^{（り）}時、^{（り）}代、^{（り）}は、^{（り）}一、^{（り）}部、^{（り）}の、^{（り）}風、^{（り）}風、

と、^{（り）}心、^{（り）}に、^{（り）}ま、^{（り）}ん、^{（り）}の、^{（り）}風、^{（り）}風、^{（り）}の、^{（り）}字、^{（り）}を、^{（り）}ま、^{（り）}ん、^{（り）}と、^{（り）}ある
 と、^{（り）}う、^{（り）}こ、^{（り）}ん、^{（り）}を、^{（り）}流、^{（り）}う、^{（り）}代、^{（り）}の、^{（り）}太、^{（り）}作、^{（り）}し、^{（り）}と、^{（り）}思
 う、^{（り）}此、^{（り）}家、^{（り）}の、^{（り）}入、^{（り）}り、^{（り）}常、^{（り）}流、^{（り）}山、^{（り）}の、^{（り）}相、^{（り）}考、^{（り）}も、^{（り）}し、^{（り）}
 款、^{（り）}而、^{（り）}揚、^{（り）}げ、^{（り）}と、^{（り）}ある、^{（り）}う、^{（り）}ん、^{（り）}と、^{（り）}風、^{（り）}風、^{（り）}を、^{（り）}の、^{（り）}こ
 家、^{（り）}に、^{（り）}流、^{（り）}り、^{（り）}し、^{（り）}ある、^{（り）}ま、^{（り）}味、^{（り）}を、^{（り）}初、^{（り）}め、^{（り）}て、^{（り）}此、^{（り）}の、^{（り）}流、^{（り）}を
 や、^{（り）}せ、^{（り）}て、^{（り）}流、^{（り）}流、^{（り）}した、^{（り）}ま、^{（り）}人、^{（り）}流、^{（り）}流、^{（り）}の、^{（り）}あ、^{（り）}ま、^{（り）}り、^{（り）}
 の、^{（り）}ま、^{（り）}の、^{（り）}と、^{（り）}え、^{（り）}り、^{（り）}出、^{（り）}し、^{（り）}あ、^{（り）}さ、^{（り）}る、^{（り）}流、^{（り）}う、^{（り）}自、^{（り）}他、^{（り）}の、^{（り）}杯、^{（り）}と
 流、^{（り）}而、^{（り）}を、^{（り）}出、^{（り）}し、^{（り）}流、^{（り）}う、^{（り）}ま、^{（り）}味、^{（り）}を、^{（り）}初、^{（り）}め、^{（り）}て、^{（り）}此、^{（り）}の、^{（り）}流、^{（り）}を
 の、^{（り）}ま、^{（り）}の、^{（り）}と、^{（り）}え、^{（り）}り、^{（り）}出、^{（り）}し、^{（り）}あ、^{（り）}さ、^{（り）}る、^{（り）}流、^{（り）}う、^{（り）}自、^{（り）}他、^{（り）}の、^{（り）}杯、^{（り）}と
 う、^{（り）}か、^{（り）}之、^{（り）}ん、^{（り）}を、^{（り）}不、^{（り）}印、^{（り）}し、^{（り）}四、^{（り）}二、^{（り）}部、^{（り）}を、^{（り）}考、^{（り）}う、^{（り）}ん、^{（り）}
 流、^{（り）}而、^{（り）}を、^{（り）}出、^{（り）}し、^{（り）}流、^{（り）}う、^{（り）}ま、^{（り）}味、^{（り）}を、^{（り）}初、^{（り）}め、^{（り）}て、^{（り）}此、^{（り）}の、^{（り）}流、^{（り）}を

亦也。又、人々江戸、宛と云ふ。と云ふも、有る事。云々
の、教へ、その、本格、云々。と云ふ。是、者、云々。と云ふ。
七人、云々。云々。を、居し。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
と云ふ。又、云々。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
を、居し。と云ふ。人々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
と云ふ。と云ふ。江戸、宛。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
も、有る。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
の、所、名。と云ふ。云々。と云ふ。大人、の、云々。と云ふ。
と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
染、ん、と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。

概、身、と云ふ。余、大、心、愛、す。余、云、云、上、若、を、論、擲、し
卿、の、目、上、お、ま、の、前、の、其、案、り、と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
余、云、云、の、前、の、一、紙、を、書、見、す。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
時、一、身、を、居、し。即、ち、云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
○坂、口、上、路、音、を、書、く。余、を、居、し。其、也。云々。と云ふ。
其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
五、峰、輝、光、の、も、と云ふ。十、と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。
余、書、に、於、て、一、元、徳、也。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。其、也。云々。と云ふ。

水自一

毛馬世

たはれきりのくはるは
まはるかたのほろぬ

あまのこころを

あまのこころを

あまのこころを

あまのこころを

あまのこころを

あまのこころを

あまのこころを

あまのこころを

あまのこころを

あまのこころを

と得るは金自かくて華を揮つんとて余
五峰の書を喜ぶ日如幼きものありて
五峰一人の書を喜ぶ余の書に去ること
も云々なりといふは成の筆札の格に書きたる
の天岩也其緻奇をみる可し而して書札の格
を遠く群を抜く余の川をてんてん
余の幼き頃の書に及ぶ所の書に及ぶ
其筆を喜ぶ市をいふしきをみる可し
余の幼き頃の書に及ぶ所の書に及ぶ
余の幼き頃の書に及ぶ所の書に及ぶ

賛語 其受けたることありて
うと其のうと所はもいふなり一杯核地
こと要もなりて開るものなり
月日の間一程の故或も有らん
ありてを友の愛するものありて
ある結なりある峰路を礼を
余の書に及ぶ所の書に及ぶ
此の賛語をみる可し
と云ふことありて
此の書に及ぶ所の書に及ぶ

表を費り物す^{月山}とあり、あやと立紙のてりも古
 元し長すも年さうとては美しありと云ふの
 あり歟(二月十九日 秋録)
 ○一月以来書畫の格を極するを^{此の}
 一よ二三階を繕ふ致し改とするも^{此の}
 七物、の味あらず、つ獲るものも一をい
 玉果亭、安本、祝言、世傳、一、二、三、四、五、
 柳、の、の、田也、余果亭の、の、を、ぬ、を、
 七、其、の、拙、を、も、と、ゆ、す、致、を、果、亭、の、紙、を、
 く、地、物、上、乗、と、さ、の、結、つ、も、も、流、石、を、祝、言、の

面、能、能、一、の、陳、留、^流、杜、毛、の、瓜、あ、と、し、架
 中、の、と、ま、く、と、ま、く、と、ま、く、と、ま、く、と、ま、く、と、ま、く、
 而、も、也、以、地、抱、一、系、水、と、て、ひ、と、ひ、と、ひ、と、ひ、と、ひ、と、
 死、を、す、く、地、流、流、の、画、七、漸、く、保、存、の、要、あ、
 こと思ふ、流、の、獲、る、一、物、を、手、洗、桶、の、中
 又、物、意、を、輪、也、し、も、さ、し、こ、を、死、す、る、ま
 白、格、を、以、て、し、格、の、柿、の、一、端、又、停、り、ま、
 なるを母描きなる、^書、^画、^紙、^一、^の、^画、^中
 七、七、故、味、あ、る、と、い、ふ、も、^地、^画、^の、^本、^来、^地
 行、の、画、物、色、手、の、成、久、^半、^似、^の、^端、^の、^結

全抄記を余尾の御下こを迄見え 高松 西の世
あふ馬をさすここの也而りも此画材を甲信
又執りしもおのりさる茶飯味を常し職
候り歸りたるも抱一流の侍の心き所始也
且つ此言の在り向 ○ するここの之んを言す
又強り ○ 而し ○ 之んを左りの向 ○ 言す
果れんまの強んす ○ 年 ○ 世 ○ 純 ○ 主 ○ の ○ 又
あふ ○ さん ○ ば ○ 長 ○ しく ○ 強 ○ き ○ こ ○ の ○ 味 ○ 比 ○ 素 ○ の
心 ○ 共 ○ 一 ○ 日 ○ 亦 ○ 言 ○ ら ○ 強 ○ き ○ の ○ 致 ○ あり ○ 三月二十
日記

○平山屯に元川大山の雑冊の跡をえり 若表禁
せ、の、書も其也也 雑冊の文ニ云

傾市州何人誰か去見終る在河州 元四

文章歌聖を映する、似る未江去るあふ
あふ、その、一、く、氣、の、利、き、く、く、文、章、を、な
と、少、く、協、画、の、致、き、く、あ、ふ、さん、も、必
ず、き、心、を、容、か、り、得、る、借、り、ま、り、を
懐、く

○山田道英南(善く也)の抄記、道英南全を同
書也 道英南の抄記、道英南全を同

を出雲所へ卜す出雲所を無春校舎の建築
柳比の地真南の居亦山々校舎の位より
也也真南未と娶るも余も未と妻を定め
而し余の居芝邊松所を在りて山田書屋と
ふ外政堂書院に筆を而して其の此(九卷記)の
真南の居を維る遠くも真南といひ
未し終る一時真南と同棲し居ることあり
南大政高家の子海津南島の子氏おゆ
しと学問大人を凌ぐ強み流文に天才あり同
窓中一卒業直ぐも題直よりとて真南

と未一う推す真南正家故、酒：親しむ終る
酒中^の毒に罹り数年前より枯れ及第
るも今迄も其の証を聴くも痛惜と極く
す

余の強さを感、真南余の筆を執る所
田村と此と越々、田に今いなるもの、其の田
近海川の城址とて山あり、真南も
以余を込る長之命あり悔とありて其の
此と此と在り、今存するや否や
真南と出雲河に同棲時代有人書生

揚句のゆきと海の衣脚を真南正北のよ
一領あるのみ夏にこゝを以て西人共用を
ある時彼れ出づる能く、あ人交々此中
行く而して終る日行せしむるに之の故也
北より南へ向てとるは花魁をも得る
を、北より南へ向てとるは花魁をも得る
つと庭前正真南北より物来余りの
うけここと一再す

○早稲田の恩賜、又河村清雄の額を掲
げんと、其の年問うるは往後の格を

市橋正義を、其の事り、其の額を掲
るは清雄の作を示して、河村清雄の額を以て
るは十を三に換へんことを、其の額を以て
三尺堂、八二三寸の、其の額を以て、揚
柳を掲げ、其の額を以て、其の額を以て、
し柳下、其の額を以て、其の額を以て、
解、其の額を以て、其の額を以て、
み、其の額を以て、其の額を以て、
腹のおろし、余の額を以て、其の額を以て、
と此書を、其の額を以て、其の額を以て、

す終る跡に入るといふ法なり (二月廿一日録)

此畫河村得意の作と云くとも、事高の語を
を交へ、此畫の成る数年前の事と云くとも河村の
第也のおろそか畫を畫する心を極め
入進んと云ふ、勢あり、ことあり、而も
河村を畫する此畫、未だ完成せざりと云ふ、
年時、畫を画す、而も河村を加へ、
や或んといひ、ことと又曰く、穉子、赤の
衣冠を着せ、ことと所得る、若くは、
お一丘の表、作あり、人物とあり、河村、
あり、

くへまぬ、苦心し終る、お山、
ことと、お山、ことと、お山、
おと云く、
ことと、お山、
倒映する、
濃々たる、
リ、濃原の色料を用ひ、
画を描く、
うらむらむとあり

○後、ねちる、大隈、
國書刊行會

昨年夏余の病に苦しむ心よりこの書の採り

ん形を採

生に紀念と

也。材料は

紙化大

し型を少

しく大きくし辛味味者

後年この書に打出さんめいをひらきしもの也。畑

の之れを作らざるは栽培の苦心を余の書を採り

とも重なる成田と平野を採りしより而して之れを

余もこれ採りて呼出しえしもの也。其の加らすし

余前年大方のあめ東洋者の書を採りて

一書に此の書採りて打出さんと採りあはれ外

に採りし採り書を採りしもの也。海軍某

作書と採りし書採りしもの也。原版を採り

採りし其の成工を採りしもの也。何れも之れ

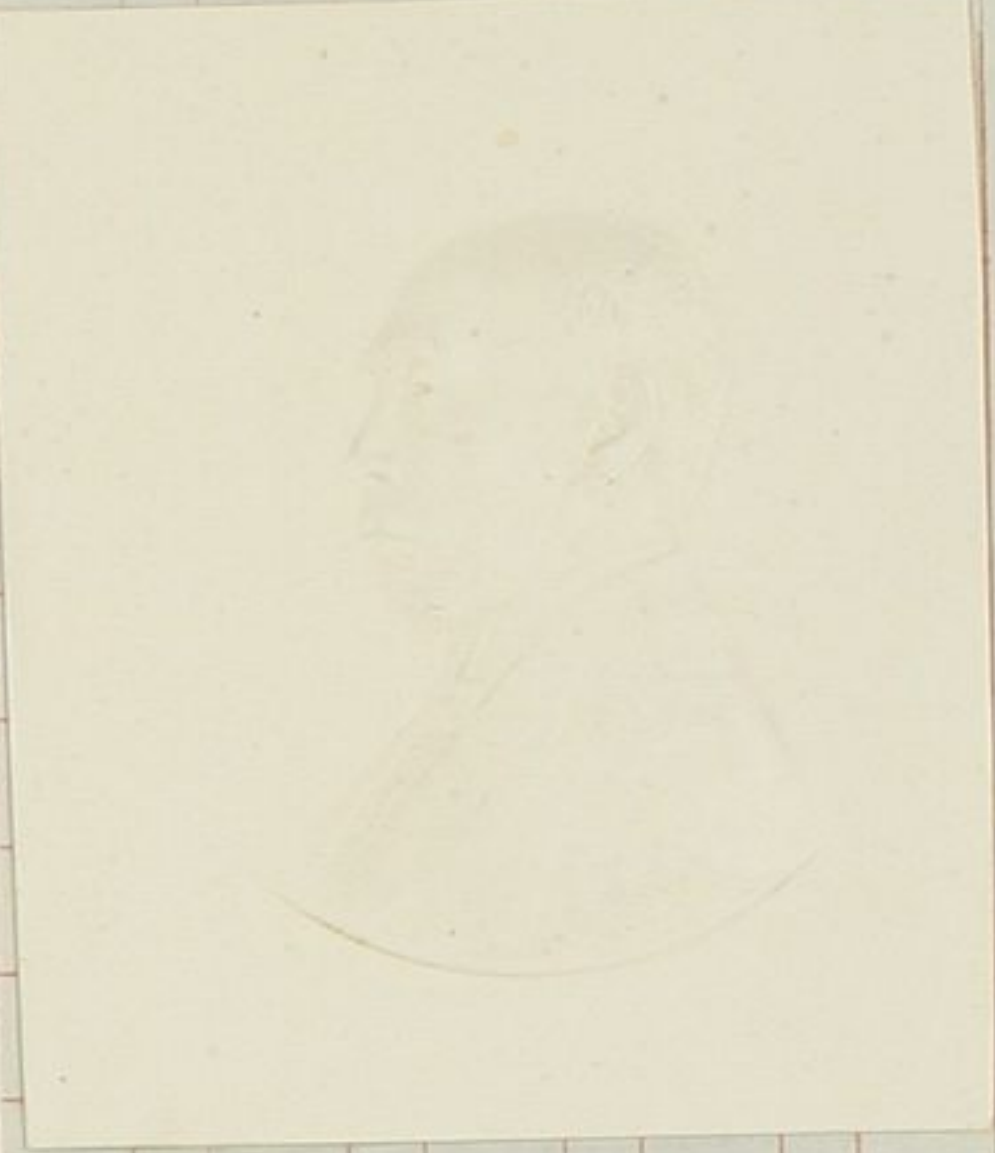
を採りしもの也。採りしもの也。採りしもの也。

も終る余の書を採りしもの也。採りしもの也。

採りしもの也。採りしもの也。採りしもの也。

を得しもの也。採りしもの也。採りしもの也。

昨年夏余の病に立ちこめしむるに、その故に
 十年式典の繪メダillon形設計
 工本を省くとの旨に紀念と
 して通つるため也。設計に
 けを大きく二十^五倍化す大
 のもの、いんを同じ型を少
 しく大きくし、辛味染者
 後元、いんを打出さんめりぬるに、その也。烟
 の之を作るに、塔橋の苦心を余の心を
 とも重なる或回と、いんを省く、而して之を



余も、これ快哉を呼出し、えんを、其に、加らすし
 余前年大方の、ある東洋者の、案を、立て
 一、二、三、の、各、像、を、打出さんと、撥し、あ、の、外
 四、五、の、細、少、黒、を、高くし、こ、う、な、海、の、某、
 作、業、を、托、り、中、市、水、も、五、寸、程、の、原、版、を、備、え、
 醜、似、し、其、の、成、工、を、祝、し、こ、う、な、何、を、あ、ら、之、の
 を、編、の、す、ま、ら、ぬ、道、に、心、地、に、似、す、る、方、條、に、す、
 七、終、る、余、の、三、名、を、満、こ、う、能、ら、ず、余、の、五、名、に
 遺、成、と、も、し、不、ろ、う、し、が、終、る、此、の、好、個、の、形
 を、得、ら、る、と、喜、ん、こ、う、な、也、

○ 雅序を物あつて本内各遊く時成を以て
 リ、毎協ぬきとる改る令とて、毎協を重ね、備
 うよ園のち高橋山本(を維)の如き、どうむよま
 二子を入堂せしむ、堂唯まを天下に對
 し、^又柱閣を敷し、どうと對し、面目立つ、この
 七堂、中入る、吳海ある、^{二物}柱閣と提
 提す、まをむら、首ねの山本外、の牧野、海
 陸のあお、皆る、園中の重職、而も、清湖の園
 園、固形物を、一七入堂せしむ、能く、まを提
 提す、まをこ、提提、まを、^{降伏}降伏也、亦二三

子のあつて、海野、あつて、不院、あつて、改る、人、あ
 責、えん、なる、也、こ、ん、ま、す、車、七、柱、閣、を、敷、し、た
 る、執、事、の、主、つ、この、く、り、高、收、柱、閣、を、提、叫
 して、る、而、目、の、主、つ、この、く、り、ま、人、こ、り、ま、人、は
 柱、閣、に、比、す、ん、ん、地、の、内、閣、と、名、受、う、ま、非、立、意
 の、この、ゆ、ま、ま、や、知、く、ま、地、の、内、各、或、許、の
 運、命、を、保、ち、得、ま、と、ま、す、や、物、中、に、外、交、の
 出、来、る、に、荒、ま、ま、事、務、を、物、中、の、執、事、に、成、さ、か
 とも、思、ふ、^ん、ま、洲、の、端、に、居、る、陸、軍、一、の、こ
 する、の、外、改、費、を、ま、く、つ、即、減、し、得、ま、金、を

みる之れを敵入るまけつ、桂の立言せるぬき
五六千歩内の節減地の内流に解るるしる
思はんが、政有今の内都漸く分裂の徴あり
●往く内顧の患をきまふまふが、陰視内
閣の運命未だわらば(廿一日記)

○終ら家はかまぬ客の別るる一書忘るる
まらう後ちいりの小説を報日して詞をきま

○宿屋(喜久)神の如椎の名あるも三原者
所その意義を問ふ、あ椎の如しと云
ふの意と其をの者所其の語をきまらる

を更ふ、喜久初めも持う後宿屋と改
ふ

の文魁の父林兼谷とまふ、その詞あり文魁の
お宿の者かあるとまふ、父と由因のる人
よし来る文魁又西の流派と對し松の
て太ッ、改るるし江に、つも一人や二人四條
流ありをきしとまふ、子乃文一、二茶
流とよみしえれ、田林、四茶、魚、鳥、魚、鳥、魚
あまも此好こ、

の流(喜)有まふ、心、道、楽、る、と、家、計、志、心

振はせしむ代に於て彼れを時りてぬ道と
ハる腰をいり寄をも曉ぬの料とて何れ
有亭の門に入るとも者刺を通じ而も
とゆふ時恰もけりやゆきしとゆつて腰を
供ふ四つつけしものもかすの焼くものを
その期に印しをハる腰のお弗しと無きよ
書せ辭して其家へゆくる家のまへ人執味
と解するよの書せの報するよを聴き有亭
の为久の感し再来從來、現に者亭の
大山宗解者の一入るうと

○有かち唯中意の身を以て表の根き
と云し清四の志法物定と云てん
思くく清法五月月一と云きと云も
生途或を切し難しと高田の云に身後
の言を托す高田慈めし四く意とす
莫んとあがり聴くも云七言に依んば
の物飛すも死するもゆんす市路のま
会を要すと終る今も身法ありて身後の
保次人と云ふ、高田の袖に袖一紙と使つ
す

○久保田米徳るるの幸也梅山初と詔の梅嶺厨
る石うをとるくも出に通りま米徳怪しり厨
の廻り見入は洋唐漢の梅上又たりてはす
又初と聞くハハハ今下婢と馳せ磨んと
市に買ハハハ而して未の巨悔くりまらるは
おむむくく待てこいをる能くすと

○芳崖麻布の毛利邸に在り候の鳴と庭
し壁面を心んと擬す而も日を好むぬを
葉を下くし唯ぶ河信川縁を吟め後と
此口を好るりや傍人之れをあらむ、昔芳崖曰

俗物を解せぬ余の葉をねくく河を
畫と作りつちるる葉を下すめと画の政
ふ式うくく時也と

○此の香川流産のたとゆめは花中の古一幅
をえる花沖と花精神共術と云ふの高貴画
とよくするも古に造詣ありと思ひの外きも
おもひのこひのうらとことろく岩尾ふ似そ
高きと、惜みくし松高案と古くはきを
案と書ま誤きしあうと

○本年の干支係：昔も昔の池中の癸丑の山嵐

ふあふふ思ひつぎ都下の文人若年を記念会
を主催するの事あり余も亦其の一人たり
しとて自ら亦其の事あり即ち其の事
に

蘭亭脩禊記念會開催趣旨

今茲大正二年ノ干支ハ乙丑ニ是レ癸丑ニシテ緬懷スレハ書聖
王右軍義之が會枕晉山陰ノ蘭亭ニ文雅ノ名士四十二人ト相
會レテ禊事ヲ脩シタル晋ノ永和九年ノ癸丑ト相距ルコト千五
百六十年ニ恰當セリ夫レ世代ノ相距ルコト此ノ如ク悠久ト雖モ
當時群賢ノ心畫ト永言トハ或ハ有名ナル右軍ノ蘭亭叙
トナリ或ハ四十二賢ノ吟詠トナリテ永ク形影ヲ留メ其ノ高懷
豪興ハ今尚其ノ風神ニ接スルガ如キ思フテシム

抑モ右軍ノ書風ガ我邦古今ノ書道ニ及シタル遺澤ハ實ニ數
少ニアラズ今ニ當リ其ノ流風ヲ追慕スルモ此ノ癸丑ノ歲ニ
遇ヒテ何等雅集ノ企無クシテ可ナラヤ是ニ於テカ吾人胥
議シ惠風和暢ノ暮春(四月三日)ヲ期シ蘭亭ニ擬セル澤
上ノ名園ニ同懷ノ諸賢ト相集リ蘭亭雅集記念會ヲ
舉行セントス江湖ノ諸彦其レ之ニ賛同シテ咸集セラレ
シコトヲ希フ

大正二年二月 日

主唱者

- 日下部 鳴鶴
- 野村 素軒
- 今泉 雄作
- 正木 直彦

蘭亭脩禊記念會々規

- 一本會、蘭亭脩禊記念會ト稱ス
- 一本會、晴雨ニ拘ラズ大正二年四月三日午前八時ヨリ午後四時マデ日本橋区濱町一丁目日本橋俱樂部ニ於テ開催ス
- 一本會、舉行スベキ事項ハ左ノ如シ
 - 一、王右軍祭典、
 - 二、蘭亭叙帖及其臨本并蘭亭脩禊図畫其他蘭亭ニ關スル物、展觀
 - 三、席上揮毫
 - 四、詩會
 - 五、煎茶席
- 一會員ニ記念トシテ左ノ二種ヲ呈ス

一、複製蘭亭帖

一、現代名家、揮毫ニ係ル書畫(抽籤)

協賛員ニ以上二種、外内府御藏及岡田氏藏王右軍眞蹟(複製)ヲ呈ス

(以下略)

○二月廿三日、山田蘭亭祭典式ト稱シ本館前

ニ是日、舊正月ノ如ク、此方ノ改局ノ祝キ存
 在、花札ノ如ク、此日ノ話ハ、何人ハ、亦、
 幸記ノ儀、甚ク、桂園ニ於テ、添田ニ奉テ、
 執ト首トカ、ぬラ、ス、ク、持テ、テ、
 ぬリ、シ、ク、ス、ク、不
 の、
 お、
 と、
 一、

外おの命を解すの事と説きしに、かゝるもの
の子供にも、さういふ道よと、いふから、言け
て、一週か、二週か、ぬす掛け出せ、さういふ
りの事、おぼき人、うけつて、早く、二三日
人心の憂、遷る、さういふ、早く、さういふ
の四十年、その、死後、さういふ、死後
の方、却つて、身、浸、さういふ、さういふ
さういふ

の、(生)命(保)険(分)社(を)一(月)以(来)被(保)入
に、欲(つ)の(絶)望(を)為(利)し、才(二)種(に)余(の)死(を)

執せんことをせむ、即ち平生の所徳の
一端を流流を、一む大要のたのめし

理想の保険

(社会改良と貧富の流動を望む)

卒然のお求めむ、何を流して、さういふ
保険会社、さう出す雑誌、ある、さう取敢へ
保険の事、さう平生の所徳を、申で見よう
その事、さう生命保険の理想を、得、さう現
し、見、さう者と、年来、其、印、さう、さう
ある、生命保険の理想と、何を、さう、さう

所以、全体生命保険其者の性質、見る見
 べ例、は長命の人を或何う犠牲うを經
 余の人の急を救ふと云、譯むある、さる更
 しく其意義を推し擴るめ、高尚者を或許
 う犠牲うして其急を救ひたいと云
 ぶん、う一口云ふ、先づ自分の理想、むあ
 り現在生命保険の重しに、行りんと是る返
 城、中等社会である中等社会と云、リ、
 りしと云、早う中等を推して是る社会、ま
 ら行りんと是る、さる、上の大急の社会、

うと、餘り行りんと是る、ぬ更さ下等、の社
 会、即ち貧乏、窮の社会、な、格を、絶對、の行
 った、是る、ぬと、さる、し、う、し、い、而して、
 余、保険、を、ぬ、有る、正下三、あ、の、格、を、どの、社会、
 へ、尤も、必要、の、ある、ぬ、と、云、し、く、大、高、急、と、云
 七、現行、の、法、況、と、死、後、相、遺、人、の、巨、大、の、相、続
 税、を、要、求、す、る、し、く、高、急、と、是、も、保、險、に
 加入、す、る、必、要、の、ある、併、し、高、急、を、免、す、角、も
 此、ら、尤も、痛、切、の、必要、の、何、れ、と、社会、の、最
 急、を、免、す、る、に、僅、く、ん、若、後、も、其、日、を、送、る

の境遇に於てハ其の労働に從ふ其人は
 自身に財産があるの心之に死後ハ
 遺言を残す者ハ會社に遺言の
 外を無し、生命保険の本業に及ばぬと
 する種々の原因がある。其れ故に目
 的の異なる方法に不備がある。云々
 有る。或る人は生命保険会社の一の
 会社である。此は其の多くは
 とうけを備へておける。保額も得る
 計系に合はぬ。保し本業の本業の

趣向人生の不幸を救ふ事と見する以上ハ
 社会の最大不幸者を漏らす事ハ救済を及
 べない。故に保険の目的を徹底したと云
 へば、生命保険会社は其の主流を執
 行する。以て之を以て未だ社会の救済
 受ける事ある。其れを以て社会の
 保険を積む。故に之を以て配りぬと多く
 の原因がある。偏し着眼の未だある者
 向はる。所以に其れを以て。勿論其れを
 被保人として之を以て。其れを困難とす

うく餘裕の無い此社会より保険金を取るに
 乏ふことを言地に行はん難い個人くと對
 手とするを以て無論出来る相法があるに
 團體を對するに於ては例不
 多數の勞働者を持つて居る会社若くは勞働
 者個人のみきよめを被保人として其の保険
 金の分配を其團體に任すると其保険料
 亦其團體より出させるより外に差支る方
 の無いとて無難に随分地方に行つて見
 と祭禮等のためを藉として其の金銭を

平生より日掛積むに置くと云つたりても
 日掛の積む所であるに月々中取するに
 ても或る又款母子講を依つて其の
 備をきつて居る所もある、保険の爲め地
 方利の便なコンナ換の事を感じて起ると
 するに其の甚はまはしいことを感ずるや
 と急速に望めるに先づ差支るるに会社
 金を對するに於ては爾も実行し易う
 併し組合と云ふものもまじく政府に認め
 べき位、此と確實なる約束をすべし

際、此種を考慮を要する事もあり、先づ
 角見の地帯に於ての或る無償の地帯を
 以て、取つても至極便利の方法であつて何
 う事もある場合に、一時多くの金を出すの苦
 痛を令ぐ此の方法に依つて除く其範圍
 の多量をえん近らうも遠うも大なる恩恵
 に與つる事の出来たる言ふ可く無い、但し
 之れと雖も、今此で使用人の為め、保険を
 うけて居る要も何うも無い、此を善なる方
 法に依つて掛けたるものありて、未だ社会

政策の注意を以てうけて居る事を無い
 物と思へば、自分の主張を、保険を社会政
 策に應用して見たいと思ふに在り、外國で
 は國家の力を以て之れを社会政策に用
 して居るが、日本では先づ私立企業の事業
 として、端を著しいと思ふのがある、獨り
 ひとビジネスメーカー、社会政策を施して漸
 やく近よし、近年、強制保険を労働組合
 に実行して居る英國の格も、一昨年より
 之れを以て労働保險の實行を始め、

坊井や石川と入る所ありてあり地人々自分
の井馬の友と云ふもつとほ井がもつた
年の十五乃び十七八と云ふあるモールス
の井馬の友と云ふんと閉じせんとをのめ
完比備つた石川や代移と既に入の石川ナ
ニトテリ仙童花のあつた様と云ふと石川
例の浦子でいふと時々千松と書いれ千松の
う書つたこととあると云ふて元ハセレ、石川の四
谷に位してたうに此の同所と同じ姓名のあつ
たといふに、あつたのむ借る間もいふて千松

千松の漢字をいふとあつたといふと坊井と
のて姓名の同じむと云ふと流しをいふて
たう片方を教員片方を任師分か
つたといふ例の真いの方をいふて、
坊井といふと外田の漢字のうと云ふ
や、いふとあつたの流しをいふと流し
と坊井のうと云ふとあつたといふと
いふとこのうと日本流を流しをいふと
うとあつたといふと文章を流しをいふと
いふと流しをいふと流しをいふと流し

と即座を去るに味もなきお境の元ある
丹をうらもあまらち改め土可...千を
丹と叫びしあけぬるも話尾花詞を
以つて止むと一せ共ん

○二月廿五日大隈印支那革命の故知あぬ又
送他と批語しぬ顔もなきもあけぬる
又漢字の中にも武官の印あり七十七九
同如のぬの風来をえる本年四十八歳と来身
幹能うと高き一癖あり男見ぬるもこ
ん革命人の世と一とを愛ありこし

ゆの類子とて元とけいし他を二十年地男
とゆくとゆくと行もゆの被ゆの流況と長
りしこも宣も其名を著しあしを多く言
ぬ又いあすもあぬの味とあぶししうぬ
又を各龍と支那の革命をゆいなるか
りもあゆふ所大也就中早稲田のあ
らあゆふも大也とてりあゆと支那のあ
英門下の胡蝶もあゆし
あゆむ士の支那とゆと日金とあゆし
あゆむとあゆむとあゆむとあゆむと

ゐる事改竄地之何如に少くもを述ぶ。余亦尚上り
 加ふべからし尺と保美のめめと母の行ふに
 法顧問と位をけしを能くせしむるを要す。つ
 切りの支那の婦人として計りては也。母也。母也
 一と能く能く下りての事と能くせしむるを要す
 を能くせしむるを要す。母也。母也。母也。母也。
 在法中一白紙の支那を精漢せんことを思ふ
 と余の其の方を同じの余の信史能くせしむる
 精漢をせしむる。房上行く。活字。松平
 破元意。母也。母也。母也。母也。母也。母也。

一、堅固に保つる事も其の法公の力なり。之れを其
 の堅固たるを志す。其の形は方田何んとも
 係し。自らの力を以て保つる事。其の形は
 八重の山。其の形は方田何んとも
 要す。其の形は方田何んとも
 一、堅固に保つる事も其の法公の力なり。之れを其
 の堅固たるを志す。其の形は方田何んとも
 係し。自らの力を以て保つる事。其の形は
 八重の山。其の形は方田何んとも
 要す。其の形は方田何んとも

異なりと十段うさ、うさや志賀のまゝの古
 路の表を渡印するも支那人同しこと多うとて
 いづく改めようし流七出の、大改入う大坂と書
 くを忘るや何あうまうの物も改と坂と志賀
 矣まうやと志賀上の流七なるは流七物やあ
 亦まうの何あう、あうまうも越中井兼山のことき
 文流う ~~流七~~ 改字を主張しとてあうが此の
 言の者まう方を氣のふてまうまうの如まう
 むあう物と思はう、あうまうまうあうの流七の
 例として中世初子ま井兼山あうのことに流七

上の方流七流七一四く自命七方流七まうまう前
 二、お市の一うまうしとん、うひまうあう
 むお市子とあうまうまう、ことあうとまう
 兄さんと同けの物まうをまうを漢解くん妹と
 漢解くんまう、ことあう或流七まう、一まう
 漢解くんまう、ことあうまう、一まう
 流七、あうまうと同けまうまう、あうまう
 心支那の物まうまう、あうまうと流七
 船中ま柳船書を流七、あうまう
 白、あうまう、あうまう、あうまう

同じけろ一乃於海の如く過しけり」後、又、
の御入、西人の相向を過せ、同じけろとせら、二、
之同じ過る、此とせら、之の御入の向を過
とせ

○二月廿七、
り、正午、院、四、夜、終、
支那料理の御入、
前七、
が支那の御入、

單 菜

餐午日七十二月二

水	炸	煮	會	鍋	雞	乾	清	紅	清
果	春	蕪	蟹	燒	絨	炸	蒸	燻	湯
乾	卷	果	肉	冬	海	蝦	鴨	魚	燕
點			笋	參	球	塊			菜

高上外、
出、
乙、
者、
ウ、
不、

味也と冬、
室の物、
時、
伊、
時、

の京都公女表西巻の真字ありて又スレ
 噴傳世奉けと皆取の者とあり友人少可前
 む先自購つて其の架巾の者とするも
 者珂羅板も之印行装釘好個の紙紙
 とすも曰人：領つ、新改郵余も又一本
 とすも、愚披て見んは往年獲き、覆版
 本と大り、面白と異り、轉移其を摩りて其
 尾の山意少人のあり、葉一、楊守敏の跋あり
 又別に内務省湖南の司書のあり、布トし、跋あり
 リ湖南の考決、轉と抄あり、たゞ之を抄出す

谷山書房の四巻、其字の字又の字、湖南の川見
 揮筆、後前録、其家多定、為智、亦其法、石楊星
 去、以為唐、花、水、今、以、別、中、石、本、校、之、行、款、既、同
 法體、亦有、至、其、神、采、其、紙、墨、筆、華、徇、燭、光、丸、石
 本可比、謂、為、出、於、永、助、似、無、不、可、為、草、然、以、湖、中、本、宋、初、津、子、刻
其、筆、疑、北、宋、人、所、書、楊、星、五、以、其、墨、其、本、獨、缺、淵、字、末、筆、其、其、武、德、日、其、其、並、失、之、數、字、也
 但此本傳來我邦、當在唐代、亦以歸化之、傳、遺、唐
 之、使、所、齋、二、王、以下、平、更、北、海、季、海、等、法、書、載
 在、故、北、舊、牒、其、可、考、獨、永、許、有、此、刻、跋、而、官
 私、著、錄、并、為、未、有、之、及、何、也、按、東、大、寺、獻、物、帳、錄

搨王羲之書廿餘行中有真草千字文二百三行淺
黃紙借綾標倚帶今此本已失去標世中而紙質行
款時與歛如帳合祇府所藏又有臨右軍草書
四行起標臨其中知過不得勅寒未數字實仿
此本停雲館帖收李懷琳草書絕交書近年
另傳其油漆物本乃唐人所撫与此本草法體
勢未近文待詔疑其右律書而懷琳摹之可謂
另具隻眼信而考之此本為歛如帳所錄王書真
草千字文殆無可疑且永師所書八百本皆搨梁
集王書董奉遠已言之東坡所云永師欲存王

氏典刑以為百家法視故本用四法非不能出新意
求變化是也然則此本搨摹其或出於永師之後
亦未可知關中石本與此形神迥肖不為無由乃謂
此本為永師真蹟亦未為盡善之至岳新矣歛如帳
所錄搨王書者石本此外尚有二本皆行書也
內府藏表亂帖及予遊定此本為天下真草法
田田氏藏孔待詔帖
書亦一嘆予生於千載之後獲自楮墨間親窺
山陰面目不藉錢木鐫石之工非至幸歟
近人往往知重田氏墨帖而不知楊摹更可貴夫
梁武帝與陶隱居去在軍時不過二百年又皆

精銳者其論樂鼓論也。不能分真其摹字音的楊
摹之精可概見矣。定貞親聞湯音徹趙摸韓
道政馮承素諸葛貞真等供奉搨書尤極其妙
楸紙摹本出其手者動值錢數萬而歐陽臨摹
入石之說武平一法書記何定之蘭亭記皆無所見
此出後人臆造也。本之於黃六在真為唐人搨摹
似其摹法已並臨官前聲云。唐人得之以臨者
摹字蓋不止專於形似之末并務神理之行筆
不得不由此法也。

唐初真書摹搨實歐褚三家皆出右軍或謂

歐尊別源私洲北碑者非也。今以三家書與北本
真書對照永興有此瘡容而無此法妍勁洵
有此峻整而無此溫潤河南有此斌媚而無此
端雅其古字書寫變化於謹少嚴非過庭以下
所企則楊守志已言之矣。

平田寺勅書凡雜法未嘗一頓以法再提高尖
如錐穎破囊六仿北本文字被字等生筆可
為奇口北本轉接波盞之次。

頃小川君將玻璃板印行此本以欲回好聖筆
唐字人輩其書一既成余因怪摹都見以付

昔し雷煥とて人あり豊城跡に吏たりと
此地に夢の氣のまよふ言あり雷煥物語し
て漸く其の舞の起るを控ひし誠なる
地をみれば、武人、干将莫
邪の名劍を獲たりと、雷煥此の名劍を
深く地底に没し、主とて揚み三人を取
りて、干将又其の舞の揚るを記す
と豊城の夢を、支那の豊城とて、干将
舞とて、干将とて、干将とて、干将
舞とて、干将とて、干将とて、干将

あとの地災也と語り終つて一笑するお
ゆ縁也と恒太り、おのの先師、洞初
あつたつと名と、樂の文卿とて、お
後河又ゆ縁の恒を名とす、世恆と云
あつたつと名と、世恆の名と、世恆
け、世恆の名と、世恆の名と、世恆
と世恆と名と、世恆と名と、世恆
あつたつと名と、世恆の名と、世恆
心は二年とて、世恆の名と、世恆
世恆を名と、世恆の名と、世恆

一、此等のこまきかと終る余え方り名を
の何三年の部りあるあめり同言事年
功徳しそ共の清志とすらるるこの既
取人ともうたるこの多く名漢と臨み感
概久之

○の次二年己巳秋七月ヨリ

末永兵衛

後藤昌雄

竹内又一

羽田文房

堀山重太郎

植村昌四郎

田中良八郎

高川俊三

幸原五郎

中村兼信

高遠亮助

岡部竹平

江口辰甲

星直武

関谷貞治

高橋善三

田原忠松

高遠耕助

本多房吉

藤井芳太郎

西村十三郎

原哲二郎

○の次三年庚午二月ヨリ

徳重高次

高遠廣吉

休藤廣太郎

長尾石雄

休藤久二

内山卯八郎

飯塚幸吉

高遠徳三郎

吉田守衛

村岡武雄

堀内太三郎

横山新太郎

伊丹誠吉

金田重平

小林吉内

市崎湯吉 市崎豐次郎 波多野安丸

所田用也 熊谷且三 熊谷恭し郎

熊谷豊丸 三河玄秀 加藤一三郎

三浦三四五郎 先井為流 藤原文作

金子貞四郎 吉本新吉氏 吉本新徳本

伊原旭雄

明次四年辛未

石川精次郎 田崎恒四郎 坂井清一郎

市崎甲一郎 天守親道 小林作平

福田克什 岩崎美七郎 新田謙

海邊善吉 井川由一郎 丹兵衛三

安藤子石存 依木昌三

明治五年壬申

畑弘治 山澤精二郎 末山栄平

釋圓院 釋天海 赤松良三郎

鈴木守雄 竹島寅治 坂川大介

坂田正亮 本間雄 本野孝吉

赤松肉丸 河色祐八 釋明子

熊谷通一郎 五郎兵衛 吉尾忠兵衛

明治六年癸酉

佐藤健作 福沢諭吉 石橋大

野田四次 大石豊大 西田泰吉

植木 某 五平侍作 河野貞次

五十元豊大 五平丈平 師尾平次

大江重忠

○志ある事なり世に与りて三又のりすす付治す
三又とハイカラなるものも細々と扱ひしじいなる
ゆへに子女の教育に心を留む。三又の家は
洋館の庭梅をもちて言ふに西人の心なるを三
又の心とす。政界に於ては理想のものと云ふ

夫人を子女に教へしむるを
と一字と閉じこむるは人地
の致をゆりこ
も也と笑へし一笑す

○三月五日 親山(市村)と書きてくる令を本

月海洋男邸の閉く事一前田のり人なる
とあり王子の邸ありて此は王子の電車
しそんと大塚しむる先き四五所の家未だ
成るもしむるをその中よりし言ふに王子の
この電車と初めて乗つて見る也
停る
坊主と山の林庵に在る海原邸と坊主と

ろくろをくわし、男を肩の上をまゝの需え衣し
纒本敷板に押さへし、今も亦ふ家の人
のゐる顔面を飾り、男快活をうみ、刑物
成装の面をきき、干支と市松花を
巻と吉きし、

親山今を毎月、金と輪書と銘々の
故、今を一日を、
み、今を、
世、
日、

又、
と、

ら、
つ、
皆、
也

○、
期、
と、
地、

ふし体或者体世とそゆのとのうう新法類
其親と家もしのりたうしてとある
互佐の法も花も家董原とくふ人
目十輪舟と名持し様をとし七ボツク
そり印してあるより一層さふふ一冊終不
しきしものさふくも一冊終る回とさふく
とる元りつとさふくのみ終るはありとさふく
○さふく紙も二二の骨董をわくや中ふ四五
と七赤雲心のもたふくをさふくは茶心と

火打焼も集る四ともしもの故換を様り
りたうとさふく人の意説さふくをさふく
しと七北里あんともさふくも麻やおまふく
西うき保集物とさふく北里各とやとさ
りたうさふく打焼の文字もさふく而も善也
さふくゆめも北里と式七右様也北里の意
元念りせともさふく人たの後の味もさふく
川筋の舟の形舟と銘もさふく江クウワカ
舟の舟は三輪もさふく舟の舟はつとさふく
海産もさふく上げさふく磁の鉢もさふく

ふしつるしめ

一田久洗自二三海のまじりし一糸

一山お元書詞一糸

此の寺尚と山前の親友の寺尚と
老田車飯らめと書葉と取らるる際
傳と書きしんを材料とすしる高
唯目わしき書詞を久くを遺傳
とす悲くく核を多うと厚分るし
中らる糖物するん

○車中録

汽車中をぬらゆくす手摺中

ふし木研をりし出でく、電もろとるやをえ
婦人者きつく、ゆつてんば、やいふ書き
ふゆふ記多しえ無きふあとも入即ち又
こゝに言へたる書いとさうぬ、汽車
わたと丹其あゝの舞式とゆふたるゆふ
の車中とをさす也

口位示強するの叔す、而存するも丹其あゝ急
者危馬の報あもり望し、報終る前炊
の時二十分あるの報利ふ、あを北巻の東
山夏ゆふとゆふあゝの病小快、りつと一

又御もみまの例なきに時多し二御も
おと話するに物もをゆるる海人も
しと思はれしにんを永決すし

○翁とあるに、ト、乞死切を定りたるに、
する前、古画、骨、董を捨て、好康、平、余
しと、思、を、ん、死、を、は、地、短、刀、を、市、場、に、贈、
此の短刀、市場の、無、存、する、と、原、平、余
又、先、の、ま、り、を、次、し、（此、式、終、り、物、を、）
：此、の、海、邊、屋、の、め、く、之、れ、を、贈、る、に、此、刀
銀、作、り、の、家、紋、も、象、眼、も、も、教、へ、し、を、ま、

刀の短、ま、り、捨、て、す、尺、を、九、寸、五、分、也、少、的
光、房、の、珠、を、し、る、に、あ、地、の、贈、り、を、い、と
り、丹、美、の、の、力、又、に、る、る、う、ら、る、る、又、光、房
の、カ、タ、し、と、七、尺、五、寸、し

○翁、成、名、松、樺、院、丹、尾、津、飯、尾、士、と、三、子
松、樺、の、翁、の、孫、に、う、海、居、氏、と、な、り、孫
を、取、り、て、成、名、と、し、し、る、と、云、ふ、に、は、
丹、尾、津、飯、尾、永、平、守、位、職、翁、の、存、存、か
撰、ひ、る、に、あ、る、と、云、ふ

○前、年、の、丹、と、丹、美、家、に、托、す、丹、と、翁、に、依

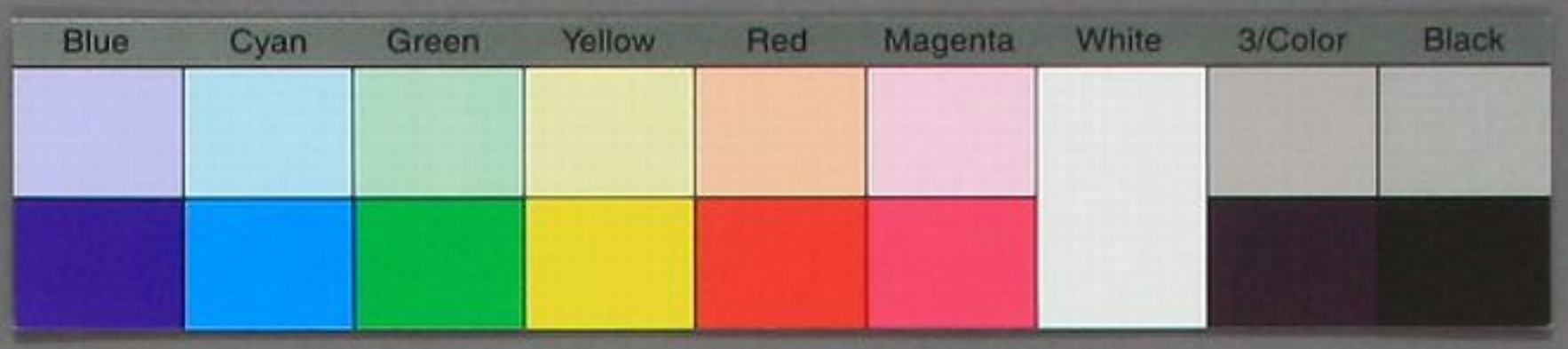
おぼろふこと大也と其の名中にも兩反する
の人と云ふ母の并々想の念し余は丹
の为りも悲歎禁する能はず

○為の葬式に親族皆合を、こゝに於て十
数年身位を絶し給ふ人と一むし合を
るを得てこゝに葬式は法要中親族
之親族情を漫ちるに役を为すとの
余毎之れを思ふ

○田舎に葬式の考習をし、葬式ゆり
家に入んところの法家前階壇を扱つて

初めに入るの俗を承るは壇を
又加味味を承るは俗を初めは
：格を又くす

○四十九縁の式を末に法屋を七々入は北
むの語を、所は格の儀を(き)え
づ四十九枚の餅を心之れを其言提寺に
捧げ、され其の儀を親族を領つを例
とす、こゝに其領る方々も也、切らるる
坐敷に運び親族各々も其茶を以る
餅とこつぱり取りし、食壇を占し



常し終る小圃を偷りて其の詩を言
即ち左の歌ありしより是也

異域流水氣波の海
張字の家夜も多し
是一村秋社に海風
吹かぬ人歌

明馬花之眼已三十七
爰尔已涯里を親物
告蹤为の親け其心
君仙更之人

在道迷る自成住色
名山度下拜原顔
四面削成多面肖如
知天下更無山

歳晚流江暮田濃
誰去独歸三時多遠
然不睡空海下少如
三縁与東結鐘

不看色也龍龍蛇
徒自遠特何足誇
興至玉磨車墨三斗
侍兒指硯例瓶花

百人樓言對夜吟
乘時掃地讀書帙
西山十里外真如
掠去江獨歸向

喜水

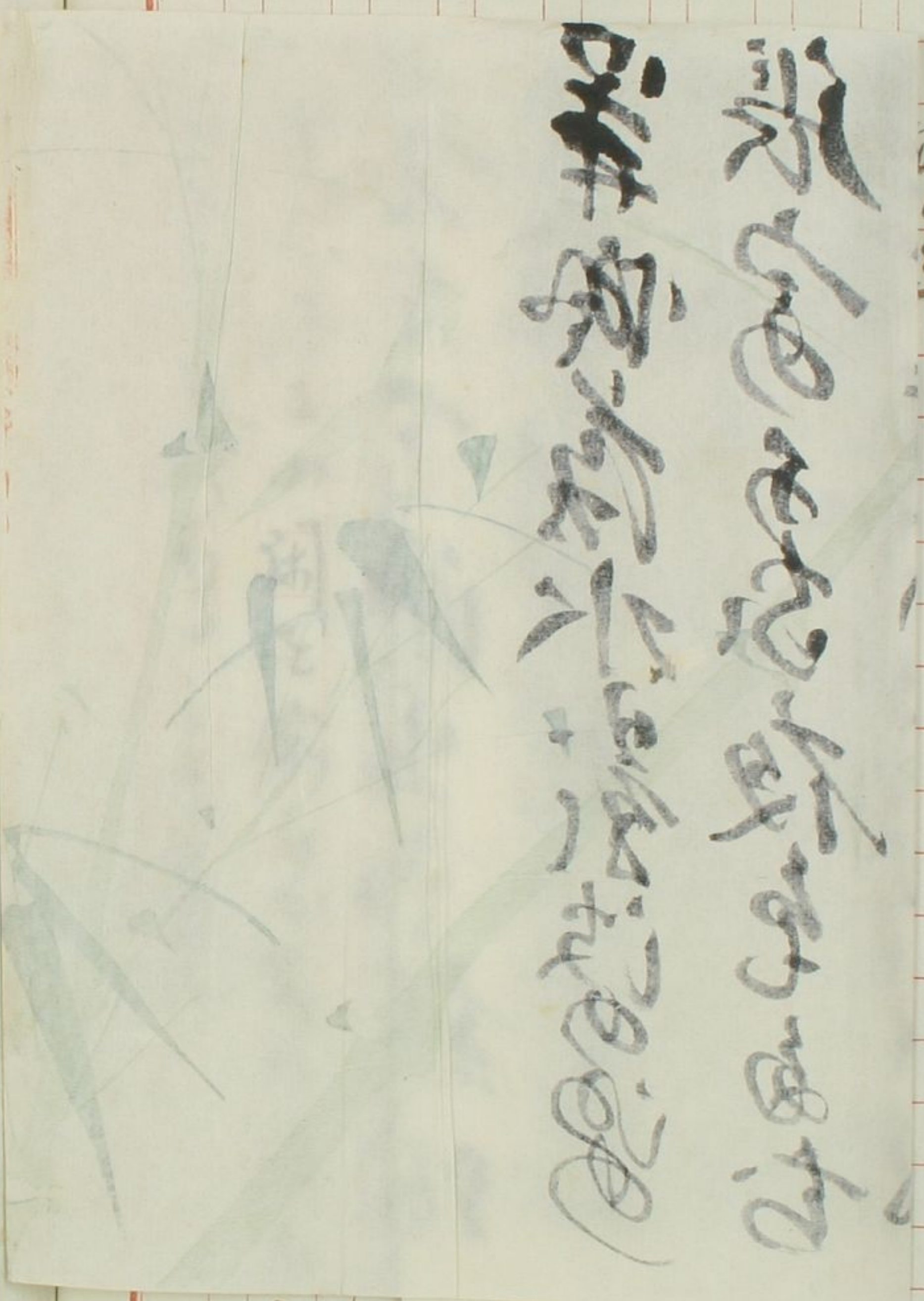
为客不画湖石尺春
秋風不見菊花開
年々殊勉而亦毛也
負家人濁酒杯



食の例とまゝ、通以餅・塩とつくる
と忌むと世義林事一と兼連するうた
い

淡い世相家の世に
誰家六人飲む酒

！ 何の玩新



○昔方の此書恐らく中年頃の著で晩年
の書の一編逸田熟るるま飲了るうと
すくすく本味味味一竹筋肉書の書
を多ふと家肴の書味二家類之れ
と流す而して今すそおの此層分を
凡そ一也もしてすおおの松を也之れを
流し得るも、頼支峯の昔、山物も
室多親父の此凡の昔に流似す、
支峰の昔も室と、曲越の流を汲む
者と謂ふなり

の西条に松尾舟共を三と早急なるの事を詠
す是に三星堂の下の人余と曰ふ也、
次早急なる事地の校名「知業館」を憶
起す、三十七八年前の事とて校名も或
んと忘るべし

草

○節也彼岸に近きと都門の松木水々
が青あけの候とあり北陸の天地と定む
妻島外也院紙の境界殊々積雪深
く汽車に阻れ止、海岸岸迄又積雪
大段而して阻れ降雪も三月中

院の形もきこふ此來稀なる見ゆ所

○下越地方積雪積り浅し然んとも機下
あつてん成通る能うか今更冬初
帰省せざることこゝ二十数年久し概
りとも機も乗る所も田も雪も
四回を歩き又西条より天王新田
六回を歩き備へる電車と味ハ
ひこむ

○機も人力の事甚むを懐念すまは
敢て新らしきもの唯今も

これより機械の直徑尺許の減平輪を
装し、雪はく土出づる所に旋を、此の車
輪を用ゆ、機械の運用に改良一歩を如
めぬものと思ふし、但此事、輪はるる
為の乗る心地をよめらるるなり

○雪車夫、市街の道路雪を除きたる
處、利つとと、機械の操縦自在を欠
き困しむるし、^此何者の愚漢が
大道の雪を拂ふ敢て人を困しむと
好笑

○余は夏始めを休めて畑有し然るに
リ芝田、七連する鐵路既に成り未だ開
通するを、之に入乗るを今更を如
とす、此間五十五分を要す、阿波の城
橋を日本より比るるより長橋、各車
乗客をよこす、乘客の感あるを
汽車はるるに、乗客の好む
心を暇し、飽しり、^此此
線路は、^此此

○帰京の車中、友人佐友の人心を

○契沖の古簡入しと校するといふ以る大に物
二と流決内絶を流る大にふたふ流決を流の
古簡一帖を流し事ふ全書内一紙内物
中、物うもりて木に之んを流し、一見其流
各物うも大に古簡の流後しと終る物
入る十教所の古簡入し紙中一月の流る
く其まし流るる流るるも其まし流るる
物内もり古中一自因の物と云るも、月日の
まきま此以の人の古物流るる所、古を校
めり流るる也 梅も改社名の流流るるも其ま
る

○契沖の古簡入しと校するといふ以る大に物
二と流決内絶を流る大にふたふ流決を流の
古簡一帖を流し事ふ全書内一紙内物
中、物うもりて木に之んを流し、一見其流
各物うも大に古簡の流後しと終る物
入る十教所の古簡入し紙中一月の流る
く其まし流るる流るるも其まし流るる
物内もり古中一自因の物と云るも、月日の
まきま此以の人の古物流るる所、古を校
めり流るる也 梅も改社名の流流るるも其ま
る

(三月十九日記)

○契沖の古簡入しと校するといふ以る大に物
二と流決内絶を流る大にふたふ流決を流の
古簡一帖を流し事ふ全書内一紙内物
中、物うもりて木に之んを流し、一見其流
各物うも大に古簡の流後しと終る物
入る十教所の古簡入し紙中一月の流る
く其まし流るる流るるも其まし流るる
物内もり古中一自因の物と云るも、月日の
まきま此以の人の古物流るる所、古を校
めり流るる也 梅も改社名の流流るるも其ま
る

郡功曹魏滂

三春陶和氣萬物齊一歡明后欣時豐駕言暎清瀾疊、德音暢蕭、遺世難望巖愧脫屣臨川謝揭竿

右將軍王羲之

代謝鱗次忽焉以周欣此暮春和氣載柔詠彼舞雩異世同流迺携齊契散懷一丘

仰視碧天際俯瞰淶水濱寥閒無涯觀寓目理自陳大矣造化工萬殊莫不均群籟雖參差適我無非親

散騎常侍郗曇

溫風起東谷和氣振柔條端坐興遠想薄言遊近郊

滎陽桓偉

主人雖無懷應物貴有尚宣尼激沂津蕭然心神王數子各言志曾生發清唱今我欣斯遊愜情亦輕暢

王凝之

莊浪濠津巢步穎湄冥心真寄千載同歸
細縕柔風扇熙怡和氣淳駕言興時遊逍遙暎通津

穎川庾友

馳心域表察、遠邁理感則一冥然斯會

王渙之

去來悠、予披褐良足欽超跡脩獨往真契齊古今

前餘杭令孫統

范、大造萬化齊軌罔悟去同競異標百平勃運謀黃綺隱几凡我仰希期

山期水

地主觀山水仰尋幽人踪回沼激中達踈竹間脩桐回流轉輕觴冷風飄落

琅琊王友謝安

伊昔先子有懷春遊契茲言執寄傲林丘森、連領范、原疇迥霄岳霧凝泉散流

又五言

相與欣佳節率尔同褰裳薄雲羅景物微風翼輕航醇醪陶丹府几若遊羲唐萬殊混一理安復覺彭殤

行恭軍曹茂之

時來誰不懷寄散山林間尚想方外窟超超有餘閒

左司馬孫綽

春詠登臺亦有臨流懷彼伐木宿此良儔脩竹陰沼掇瀨縈丘穿池激湍連
濫觴舟
流風拂狂渚停雲蔭九皋鶯語吟脩竹游鱗戲瀾濤携筆落雲藻微言剖纖
毫時玆豈不甘忘味在聞韶

穎川庾蘊

仰想虛舟說俯歎卅上賓朝榮雖云樂夕斃理自因

王宿之

在昔暇日味存林領今我斯遊神怡心靜

嘉會欣時游豁尔暢心神吟詠曲水瀨淥波轉素鱗

鎮軍司馬虞說

神散宇宙內形浪濠梁津寄暢須臾歡尚想味古人

王玄之

松竹挺岩崖幽澗激清流消散肆情志酣暢豁滯憂

王彬之

丹崖竦立葩蒨暎林淥水揚波載浮載沈

鮮葩暎林薄游鱗戲清渠臨川欣投釣得意豈在魚

郡五官謝繹

縱暢任所適回波縈游鱗千載同一朝沐浴陶清塵

王徽之

散懷山水蕭然忘羈秀薄縈穎踈松籠涯遊羽扇霄鱗躍清池歸目寄歎心

冥二奇

先師有冥藏安用羈卅羅未若保冲真齊契箕山阿

行叅軍徐豐之

俯揮素波仰掇芳蘭尚想佳客希風永歎

清響擬絲竹班荆對綺䟽零觴飛曲律歡然朱顏舒

徐州西平曹華

願與達人游鮮結遨濠梁狂吟任所適浪流無何鄉

王蘊之

散豁情志暢塵纓忽已招仰詠挹餘芳怡情味重淵

司徒左西屬謝萬

肆眺崇阿寓目高林青蘿翳岫脩竹冠峯谷流清響條鼓鳴音玄嶠吐潤霏

霧成陰

司冥卷陰棋勾芒舒陽榷靈液九區光風扇鮮榮碧林暉翠葦紅葩擢新莖

翔禽撫翰游騰鱗躍清冷

上虞令華茂

林榮其鬱浪激其隈汎々輕觴載欣載懷

中軍恭軍孫嗣

望岩懷逸許臨流想竒莊誰云真風絕千載挹餘芳

陳郡袁嶠之

人亦有言得意則歡佳賓即臻相與游盤微音迭詠馥焉若蘭苟齊一致遐

想揭竿

四眺華林茂俯仰晴川渙激水流芳醪豁尔累心散遐想逸民軌遺音良可

玩古人詠舞雩今也同斯歎

行恭軍王豐之

肆矚巖岫臨泉濯趾感興魚鳥安居幽時

詩不成各

前行王府任府鎮

謹啓 親花新角

好叶青... 安... 祝... 佳...

公... 共... 游... 身... 佳... 多...

敬啟者...

八念...

...

謹啓 程花新角之
 好時 弟之安事 祝當 產健
 公之 勝 每身 健 每身 健
 春 月 言 蘭 之 子 修 禊
 記念會 詩會 成 家 綫 永
 和 蘭 亭 雅集 之 詩 何 堪
 一 分 (二首 有 三首) 以 頌 韻 長
 願 彼 少 年 弟 之 上 別 笑 以
 揮 囊 之 上 苟 詩 集 亦
 故 之 上 大 幸 之 到 羊 所 而
 當 日 之 弟 上 於 子 柏 墨 題
 聯 句 亦 無 之 左 也
 大 山 堂 堂 也 三 月

詩會 主 筆 永 坂 周 二
 日 委 負 土 居 通 豫

市島海吉殿



翔禽撫翰游騰鱗躍清冷

上虞令華茂

林榮其鬱

中軍

望岩懷逸

陳郡

人亦有言

想揭竿

四眺華封

玩古人註

肆貯巖岫

公命會之會之會之會之

公命會之會之會之會之

公命會之會之會之會之

公命會之會之會之會之

公命會之會之會之會之

公命會之會之會之會之

詩不成各飲酒三觥者十有六人如左

前餘杭合謝藤

行泰軍事丘旄

王獻之

府王簿后綿

任城呂系

府功曹勞夷

鎮國大將軍下迪

彭城曹謹

侍郎謝瑰

府主簿任凝

行參軍楊模

參軍孔盛

參軍錙密

前長岑令華者

任城呂本

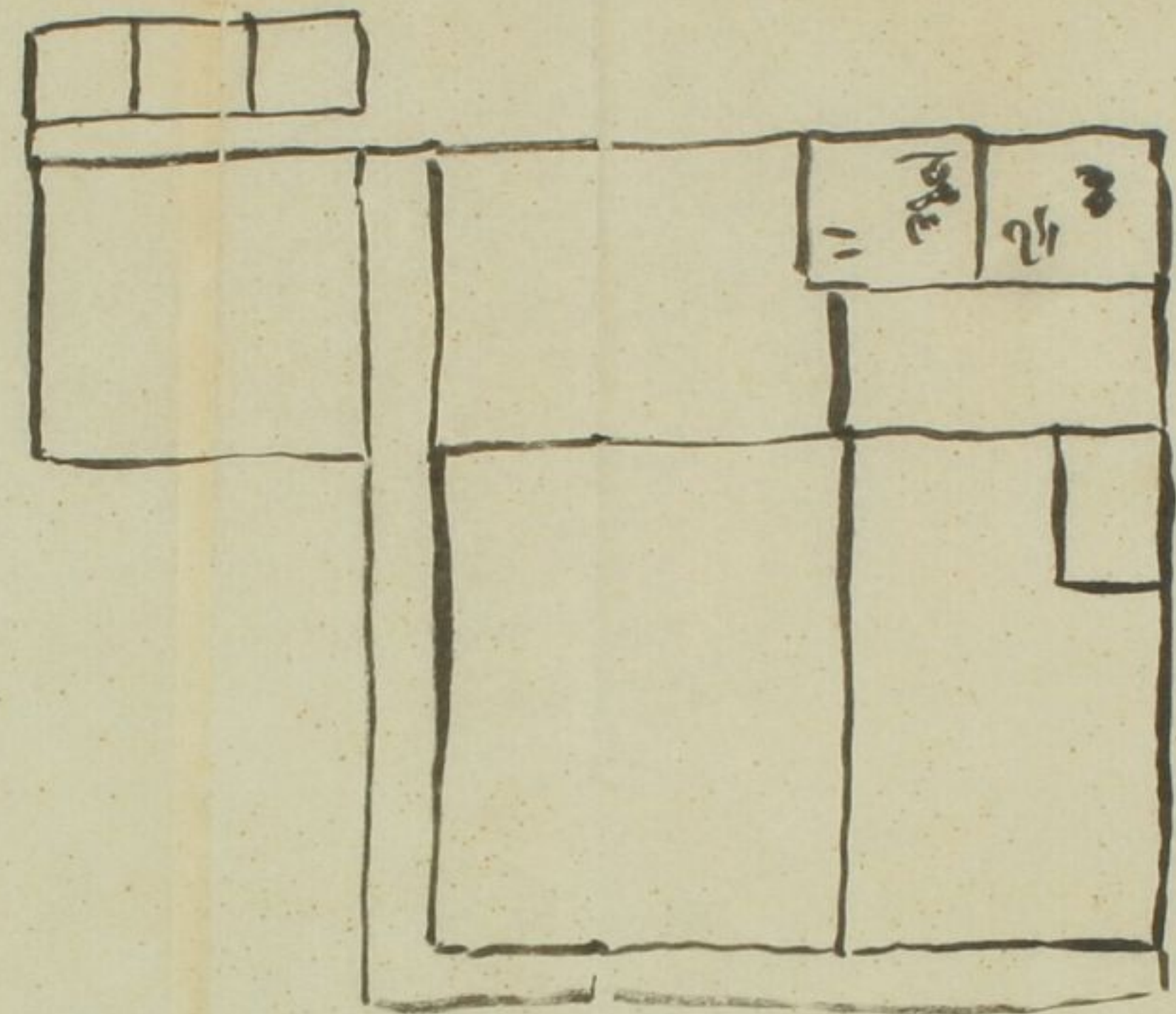
山陰令虞谷

國書刊行會

永和九年。歲在癸丑。暮春之初。會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也。禊。潔也。於流水上。潔身。祓除不祥也。羣賢畢至。少長咸集。此地有崇山峻嶺。茂林脩竹。又有清流激湍。映帶左右。引以為流觴曲水。列坐其次。雖無絲竹管弦之盛。一觴一詠。亦足以暢叙幽情。是日也。天朗氣清。惠風和暢。仰觀宇宙之大。俯察品類之盛。所以遊目騁懷。足以極視聽之娛。信可樂也。夫人之相與。俯仰一世。或取諸懷抱。悟言一室之內。或因寄所託。放浪形骸之外。雖趣舍萬殊。靜躁不同。當其欣於

所遇。豐。暫。得於己。快然自足。快。作快。非快。然自大之意。不知老之將至。及

其所之。既倦。倦。倦。情隨事遷。感慨係之矣。向之所欣。俛仰之間。以爲陳迹。猶不能不以之興懷。况脩短隨化。終期於盡。古人云。死生亦大矣。豈不痛哉。每攬昔人興感之由。若合一契。未嘗不臨文嗟悼。不能喻之於懷。固知一死生爲虛誕。齊彭殤爲妄作。後之視今。亦由今之視昔。悲夫。故列叙時人。錄其所述。雖世殊事異。所以興懷。其致一也。後之攬者。亦將有感於斯文。



想入のことゝもいふを子孫圖して之くふとて(想入の
木の位を^有圖の如し)(三月十日)
日知八井上安もいふ親家無花の教書と宗
ちやう一説の如く紀念の以て先考也ともい
ふもいふをいふといふといふといふといふ
わらへいふといふ

親為^は書

清風^は書

友于^は書

新肥方^は書

こも皆あ親家の無花をいふといふこと
と内容を一説していふは前記するをいふ
右四書の内

親為^は書

と親をいふ江戸にありて

州著の尾為といふといふ毒段溜地智

光院にありていふといふ親為の如く

いふといふといふといふといふといふ

書に親為二字題名ありといふといふ

本家の長又ありといふといふといふ

本家の長又ありといふといふといふ

と無延被あし、こゝき、筑味あまもあ也
同中、方改の資、雨ふ、遊心、こゝき、の、柁
柁と、志、こゝき、井、田、の、物、既、あ、る
さ、う、わ、る、に、山、物、四、島、例、し、て、悉、既、と、さ、く
こ、す、一、山、物、の、世、説、を、本、米、の、急、須、を
辨、ひ、ま、ん、と、老、母、方、へ、老、母、を、さ、う、り、給、い
る、し、う、こ、し、本、書、お、し、ら、し、こ、の、さ、う、こ、こ、三
つ、七、あ、ら、し、の、自、入、の、考、を、こゝき、と、さ、く、こ
と、許、さ、ら、り、し、こ、と、さ、く、を、あ、ら、り、の、後、
あ、ん、が、お、し、ら、ら、う、こ、も、又、た、た、ま、を、あ、ら、し、こ、

こゝの、既、し、き、ま、り、金、と、あ、ら、り、小、井、杉、屋、の
し、七、百、と、井、田、の、う、ま、う、け、節、の、り、あ、ら、り
方、改、の、柁、を、志、ま、り、ま、り、書、き、こ、う、ま、り、こ
と、さ、く、も、あ、ら、り、其、の、金、文、を、さ、く、し、こ
の、あ、ら、り、収、め、ら、れ、り、と、さ、く、

○四月三日 王義之、書、ま、り、修、禱、会、(日)を、格、作
(樂)部、へ、別、り、る、也、梅、上、に、陸、別、所、あ、り、墨、牘
七、八、十、紙、皆、ま、り、ま、り、書、き、ま、り、ま、り、と、能、書、
こ、使、ひ、ま、り、こ、の、あ、ら、り、と、さ、く、選、擇、の、杜、撰、宣、り
あ、ら、り、ま、り、ま、り、ま、り、(因)め、り、ま、り、又、格、十

出来さくし唐代の双鉤を心物を解きまよ
 きは細い篆書式の双鉤をみせしむる
 し思ふに先づ漢書より双鉤し後ハ濃淡
 さましく二重墨しするを人歎何んとい
 七北の二重を京都一裁之の尤きもの也
 此めうと強んと云ふをいこのうーとまふて可
 也今ハ茶店の後けあつて入りて一杯を喫
 つけし黒木吹雪を菊地俵もあつて其の墨帖
 の淡をみたり西条の内条湖南う世氏義之
 ；此に寧ろ大膽をこくふの評をみすを乳

果ううとしも程々の話出で自分からるの念
 の抽籤ハ不折のお整圖とあつてさきにも
 流せは竹巻をよお不折うききいふ書ハ雨
 子ろききいふのちもきえと誰んあつてあぬ
 がまゝとまゝくの義之の墨帖の海列を
 あつて書けり内条湖南鶴の歎の心を
 書けりまゝとまゝと云ふ余も一笑を漏らしし
 こを物にあはれあつて好うといふは休まぬま
 つまふとせよ此れを此の茶店より物
 茶店のお白の菓子も配うこととまゝと

の總裁、推さんと云ふ事あり、二九と協会立
年事の病中と云ふゆゑ、請求せしことあるも
辭退しと云ふけり、その余り口を五
と、仔細に記述終り、其の承諾を以て
候と南英、又長らくして、訪道に、既終と
既味ありと、今、乃、心、を、回、す、人、を、要
す候、一、流、を、坂、今、前、途、の、後、ま、り、保
に、此、の、度、を、互、義、塾、回、考、候、を、言、語、と、し
坂、今、の、地、方、会、を、可、く、余、と、し、候、の、義、を、
候、候、と、心、を、多、の、満、進、を、得、し、候、と、候、

入り、東洋物、之、あり、と、云、ふ、と、西、村、林、の、友
と、既、あり、と、思、ふ、を、重、々、四、十、一、日、の、後、ら、と、
と、地、方、会、上、回、考、案、の、本、多、條、治、也、
回、考、案、費、主、回、考、道、花、行、し、つ、き、詳、細
候、と、不、成、と、云、ふ、候、と、
大、意、也

道花行合款十二

洞真部

大乗

佛、經、と、云、ふ、大、口、記、
云、此、天、考、山、の、記、

洞玄部

中乗

佛、經、と、云、ふ、
三、十、三、天、考、山、の、記、

洞神部

小乗

支、子、の、心、を、
此、の、記、

太玄部

太、玄、部、大、法、也、と、云、ふ、
部、を、助、け、乃、ち、太、玄、部、の、洞、真、部、
と、助、け、

太平部

北部と洞言部を助け

大傳部

北部と洞言部を助け

正一部

北部と洞言部を助け

三部をすべし即く

玄壇天尊 三法天尊 三昧明王

皆五道家の祖師の尊號也

道教の古 彙刻古田より五十四卷あり十五

巻とありしもの版より二冊ありはる

即同古案を看ると四千八百八十巻あり

支那の古と北東の房教の田利白雲

親の形骸全部ありと云ふ所あり

とも北東の神元と云ふ其西人の云

ふ所を其言を白雲を親と云ふ所

あり全部あり是れを其の國を案

ふると、此人の中書親を云ふ

より其の國を案のと此教の洞言也

と其の本多其言を云ふと其の

て其の一親を其を言ふ、如何なる

ありしを其の總我のこの世に

也

圓も泰のき 帖の敷 四千百十五帖

長々 一尺六分五厘

幅 四寸二分毫

半兩 五行十七字

楯 堅ハ寸九分

此有の第... 依伯候毛利高標の就

了所とまふ

依伯候毛利高標字培松尾書意之

印



簡易生活

市島謙吉氏談

日本の家庭に於ける將來の緊要なる問題は、簡易の生活を營むにありと

三代前かされておいて、今軽便な云ふ事は中

い耳の上... 但首の筆... 耳の... 耳の... 耳の...



忠 孝 忠とは何ぞや、又孝とは何を云ふか... 孝は、併しなから現在我國

功業の大小は體力の強弱に批例す... 男爵淺澤榮一氏談



正家の庭



時代、また立憲法治の時代たる今日、雖其精神には固より變りは無いが、其現はれ方が違つて居る、是れは篤と注意せねばならぬ要點である、古來歴史上の人物を批評するに、君主の命只惟れ従ふものを倭と云ひ君公の威嚴を假つて私を營む是れを奸と云ふ、專制時代に於てすら尚ほ且つ歴史家が是れに對して筆誅を加へて居る、水戸の義公が大日本史を編述したる意旨は、春秋の義に則りて、世道人心を正すに在り、又勸善懲惡の意であつた、春秋起つて亂臣賊子懼ると云ふが如くに、大日本史起つて大義名分定まると云ふべきである、而して大日本史を編いて見ると、君國の爲めにならぬ時は、君主の威嚴を犯して、死を恐れず諫争するやうなものを忠心としてゐる、是れに反するものが即ち奸佞の臣である、次ぎに孝の意義であるが我國では昔から「忠孝無二」と謂ふて、孝と忠とは、離る可らざる關係を有する事をいふて居る、日本人の孝の心は、祖先敬たる敬神の思想よ

の強健に關係するものが多し總べての事を成すには體力の強健を必要とする、體力の強健なる所に健全なる精神の宿ることは生理的原则であつて體力が強壯でなければ如何に才能が非凡であつても之を用ふることは出来ぬ、體力の強健なるものは大事を爲し之に反するものは才能あるも大事を爲し得なかつた一二の例を話して見れば

徳川家康公
徳川家康はたしか七十五歳まで生き、其豊臣家に代りて天下を一統し三百年間泰平の基を開いたことは、體力の強かつたことに原因するものである、若し體力が弱かつたならば如何程才能があつても此の如き偉業は爲し得なかつたであらう



扱ふことと同様に取扱を不服と思ふから篤とせしめたい」と宣ふ、あるが不幸に業の見る可あつたならば

國も泰のま 帳の教 四千百十五

國書刊行會

〇友人内藤久寛村お中石地の屯先三帝を以て
 北朝の子孫を掃か出の事也久寛女の家を以て
 其の徳を以て入ることと成りし所以碑とて立て
 んとて余の爲に余のみならず大恩徳に堪え
 兼て其の徳を以て子の由あるの隨筆の爲に
 ありとて又その事久寛と以て傳つて快流を
 世に傳ふ、傳つて友人松本破元と名有り、伯
 代心と托し又其の款の代心と在る事都出
 人器振正、托す、其の款又行其、即
 左の如く

明治天皇駐蹕碑記

内藤氏越後之素封也世有德望名重鄉黨
 系出藤原秀郷天正中、有仕上杉輝虎者、子
 孫降爲農、遠居川羽郡石地町、至今十世
 三百餘年矣、明治十一年、車駕北巡、九月十
 四日、以其家充行在、召主人久之、謁賜御盃
 金帛、久之感泣、如得華衮之褒、頃嗣子久寛
 欲建碑紀聖恩、以貽後昆、請文重信、恭惟先
 帝仁均、覆載夙巡、率四方察土、風問民瘼、遐
 壤僻邑、無不蒙主化、乃雖造次、爰舍之跡、兩
 露所宿、膏澤所留、孰敢不敬重愛護、况親拜
 天顏、承德音者乎、宜矣、内藤氏之有比舉也
 當時重信、忝在扈從之班、猶記翠華所過、田
 野開炊、煙簇、民物富庶、老幼嬉、相得、今既
 歷三紀、治教日進、民生加厚焉、於是益知休
 養涵煦之深也、嗚呼、先帝雖崩、而遠德遠矣
 觀此碑者、寧得不思報効乎哉、乃託以助越
 人併示内藤氏之公私寵榮云



此田早稲田大ニ三十二年記念ニ授けられた
 此ニ銘えし銅牌一面の云々也其
 田ニ大隈由方等ノ事ニ関スル事ニ
 托し之ヲ記シ置キ

○早稲田大ニ授けられた銅牌一面の云々也其
 田ニ大隈由方等ノ事ニ関スル事ニ
 托し之ヲ記シ置キ
 〇早稲田大ニ授けられた銅牌一面の云々也其
 田ニ大隈由方等ノ事ニ関スル事ニ
 托し之ヲ記シ置キ

早稲田大學教旨 (草案第六号)

早稲田大學は學問の獨立を全うし學問の活用を遂げ模範國民を造就するを以て建學の本旨と為す。

學問の獨立を全うせんとするが故に本大學は自由討究を主とし獨創の政修に力め政教其他一切の羈絆を受けず以て世界の學問に裨補する所あらんことを期す。

早稲田大學教旨起草委員會

學問の活用を遂げんとするが故に本大學は常に學問と實際との一にしてニおらざる所以を信じ學理を學理として討究すると共に之を國家社會に活用するの道を講じ以て進取の人材を養成せんことを期す。

模範國民を造就せんとするが故に本大學は内は立憲帝國の忠良ある臣民として齊家經世の任に堪へ外は廣く世界に活動するの資を具へ國民の典型たる人格を養成せんとことを期す。

朱氏不義華山寺西院一教

國書刊行會

三五三 華山聖賢帖 繡潭板 十二幅 壹冊 丈九寸八分

尊道
 丙申歲月行城
 七



國書刊行會

○十四日 杜香も印三顆と書さ
 じは：姻戚三田酒訪前同此
 石教館 花より所 衡齋二
 字と刻る印と文 彭の
 心より彭の款を 衡市と
 沈南嶽の部よりつと梅園
 の花せしよりつとふ材石也
 雲木片終一更の印と書さ
 ぶ鈕木印 高其其其心と書
 ふとを款也 ころも梅園の部



と傳ふ 書海二言と刻る不
 の杖に存在する代を



杜香外に筆の同一と推くまは 忠徳の輪
 廓の象牙を挿入し 全面刻字ありし文
 法をこころし 中馬車あるのやいふのにお
 ちしめ代を 往年杜香の文 聖平坊の
 一松を並置せるの物と推し入るは
 一名と書ふからぬ 余の其提寺五十年の
 念考のゆゑにゆしなるこの杖にしを余の

樂やふゆき松あけのふもあきと入るもゆきの
のま麻のふと刻のふ又あを鏡す、印と未
こ購ふと決せしむ (四月念の池)

天下一品集

各圖書館文庫及び藏書家等が、是を天下一品の物であるとして、御自慢の品を拜借して、古くは『睡餘小録』『寸錦雜綴』近くは『麓の花』『撥雲餘興』の體裁で、漸次紙上に掲載して見たいと思ひ起して、豫告以後採訪に力を盡したが、さて思ふ様にならぬが憂世である、是は妙だ珍品であると思へば類品が現れたり、類品が無いとまると雑誌へ適當なかつたりして、荏苒今日に至つたのであるが、かう考へ込んでは何日掲載するといふ期も計られな

逸助とか云ひしが、彼者暇を貰ひ世帯を持ち中或年の七月に魂棚へ上る燈形の燈籠俗呼びならはせりを逸助は數多く買出し、長き竹に通して市町を賣り歩行しが、其年は賣人多く、方燈の出來も多かりけん、逸助が燈籠は少しも買はず、朝より夕まで聲を喚して走り歩行て、僅に價八文にて二ツ計を賣ければ、困じ果つ、蜀山先生の許へ至りしに折よくも先生の端近く出らるゝを見て、逸助は悦びながら先生に向ひ、盆燈籠を召給へと願ふに、先生は笑はせられて、奈何に汝を賣るに思へばとて、盆燈籠を我に求よとは、餘に情なき頼かな、夫計は用なき品なり、許せかしと云はるゝを、逸助は本意なげにて、いな此品は主君の好ませ給はぬ物なりとは兼て知り候へど、今朝より市中を馳歩行て、燈籠の數只二ツを賣しのみ、家内には猶百餘の數を仕入て候ふが、日限定まりて際物の商ひなれば、盆後になりては如何とも詮方なし、馴ぬ事にか、づらひて、先達惠ませ賜ひし反古の元金をも失ひなん事の歎はしく、悔み候ふなりとありしかば、先生暫く打案じて、然らば其燈籠を不殘此所へ持來れと有を聞て、逸助かしこまり急ぎ我家に立歸り、買入置たる方燈々籠を不殘持來り、先生の前に積上げしが、

蜀山大人は忽ち筆をとつて、彼燈籠の連の書の上に、狂句狂歌の可笑き事を筆に任せて書記るし、一通の廻状を認めて逸助に與へ、これを以て汝が知りたる我門人又は知己の家、狂歌俳諧の連中へ燈籠を持行き、調へて貰へかしとありければ、逸助は九拜して勇み悦び、百四五十餘り數ある燈籠を四五度にかつき出し、が、風流に遊ぶ人々の家に詩行て、可笑き廻状と盆燈籠をさし出せば、何れも其洒落を珍らしと愛悦び、何宗旨の差別もなく、魂棚飾らぬ家にても、盆未なる盆燈籠へ蜀山人の名を記せしが、風雅にて面白しと買求め、一軒にて三ツ四ツ或は五ツ七ツと買調へて、夫々の懸意の方へも送りしかば、昨日は朝より夕方まで、八孔の價にて只二ツ賣りたる燈籠も、今日は先生の惠の戯れに依て、一つを價二百孔三百孔に求められて、忽ち五六兩の金まふけしたりしとぞ、



蜀山先生の家

蜀山先生の家

胡之之之，如海陸陸，此是「大正二年」
日之之之七之之之

以下全て
白紙

